

「星空と路－上映室－」トーク 佐竹真紀子（アーティスト）×佐藤正実（3.11 オモイデアーカイブ）×高山智行（HOPE FOR project）

開催日時：2017年2月26日 17:50-19:00

話し手：佐竹真紀子（アーティスト）×佐藤正実（3.11 オモイデアーカイブ）×高山智行（HOPE FOR project）

進行：北野央（せんだいメディアテーク）

北野：今日のご来場いただきありがとうございます。せんだいメディアテークの北野です。この「星空と路－上映室－」は、せんだいメディアテークで2011年5月からやっております「3がつ11にちをわすれないためにセンター（通称：わすれん!）」という、様々な立場の人が震災の記録・発信をするのを支援するプラットフォームの事業のひとつとして行っております。それで、その参加者の方々が映像で記録されたもので、素材のままのものや、編集されたものを、試しに上映してみようという場がこの「星空と路－上映室－」になります。ですので、今日お話しただくお三方も、荒浜やその他の沿岸部でご自身の活動をされていて、その活動を映像で記録されています。それを、わすれん!に寄せていただいて、上映させていただいたり、その後DVDとしてメディアテークの2Fに配架させていただいて、市民の方に見ていただく機会をつくっています。

それで今日のトークでは、見ていただいた3本の、荒浜という土地においてプロジェクトをされている、佐竹真紀子さん、佐藤正実さん、高山智行さんとお話を進めていきたいと思っています。その前に上映された蒲生の映像も、佐藤さんがされているプロジェクトですので、トークの中では、荒浜だけでなく蒲生や他の沿岸部も含めて、お話を伺えればと思います。

では最初に、お一人ずつ自己紹介をお願いしてもよろしいでしょうか。改めて自身の映像を見た感想や、他のお二方の映像を見てみての感想などもありましたらぜひお願いします。

佐竹：今日はお集まりいただきありがとうございます。先ほどの映像のうち最初の映像をつくりました佐竹真紀子と申します。私は、絵を描いたり、モノをつくったりするアーティストをしております。

北野：映像を見てのご自身の感想などは？

佐竹：HOPE FOR projectさんまでの一連の映像を見て、すぐに言葉にするのが難しいのですが、ものすごく率直な感想から言わせていただくと、私は自分の活動をしている間も、お二人の活動が荒浜で行われていることは知っていて、ものすごく遠いところから参加させ

ていただいたり、SNS で見ていたりしていました。というのもあり、それをまたスクリーンで見るとというのはとても新鮮な感覚でしたし、HOPE FOR project さんの風船リリースのシーンを、大きいスクリーンで見られたことがすごく嬉しいなというのがあります。

北野：ありがとうございます。では、佐藤さん、お願いできますか。

佐藤：「3.11 オモイデアーカイブ」の佐藤正実と申します。今日はお集まりいただきましてありがとうございます。蒲生と荒浜の 3.11 オモイデアーツアーについて 30 分ずつご覧いただきました。これを撮影したのは、20 世紀アーカイブ仙台でカメラマンをしている佐藤敏行さんです。蒲生と荒浜とを 2 日間ずつ取材をしてもらって。映像はなるべくバイアスをかけずにお涙頂戴にならずに、ということをお願いしましたが、あとはお任せでした。

彼はツアーに初めて参加したので、蒲生と荒浜のまちや人がどう見えるのかを、そのまま 30 分間でまとめて欲しいと伝えました。私もオリジナルを見たのは 1 週間前でしたが、非常にわかりやすく編集されたのではないかなと思います。

それから私も、今日初めて佐竹さんと高山さんの映像を拝見したのですが、祈りのかたちというよりも、先ほど高山さんも映像の中でおっしゃっていたように、「悲しくないようにしたい」というか、「苦しくないようにしたい」というようなことが、多分佐竹さんにも、オモイデアーカイブにも、HOPE FOR project さんにも、共通している気がしました。

高山：本日はお集まりいただきありがとうございます。HOPE FOR project の高山と申します。僕の地元は東部道路より東側の場所で、そこに住んでいて、子どもの頃から遊ぶのが荒浜でした。映像でもお話をさせていただいたのですが、震災後の 2012 年 3 月 11 日から、映像で見ていただいたように、花の種が入った風船をリリースするイベントを行っています。また、今年の 4 月末からは、来年度オープンする荒浜小学校の音楽室で、その卒業生を中心に荒浜に縁のあるアーティストさんをお呼びして、その日を穏やかに過ごせるような企画を続けています。

お二人の映像を見させていただいて、「来る側」と「迎える側」は、やはり違うんだなと思った反面、荒浜小学校前に立っている佐竹さんのバス停には「ようこそ おかえり」と書いてあって。「おかえり」というのはそこに住んでいた人しか言えない言葉だなと思っていて。それを汲んでくださって、バス停に記してくれたというのは感慨深いなと思いました。

北野：「来る側」と「迎える側」というのを、もう少しお話いただけますか？

高山：蒲生も荒浜もそうだと思うのですが、そこに住んでいた人たちにとっては、やはりあそこが帰る場所なんですよ。海水浴やその他のことで思い入れがある人にとっては、やはり迎える道であると思うんです。住んでいた人からすると、「おかえり」と言えると所なの

かなと思いました。

北野：佐竹さんは、それを書いたきっかけとか何かイメージとかあったんですか？

佐竹：荒浜小学校の前のバス停に「おかえり ようこそ」と書いたのは、今見ていただいた映像の後のことなんです。バス停を増やしていきたいなと思い始めて、一つだったものをどんどん増やして行って、かつそこにいらっしゃる方に会ってお話を聞くということを始めました。その時に、「おかえり」と言う人がいないということを現地で聞きました。でも今ここに人が住むことはできないので、もし誰か一人で来た時に、その声を掛けてあげられることがないのだなと思ったんですね。だったら、私は絵を描いたり、芸術を考えたりする人なので、その穴を埋めていく、補っていくことができるのではないかと思ってつくりました。

北野：佐藤さんのオモイデツアーでも、「おかえり」「ようこそ」というがあったと思うのですが、それも同じようなイメージですか？

佐藤：先ほどの高山さんの言葉をお借りすると、私たちオモイデツアーで活動しているのは、やっぱり「行く側」なんですよね。荒浜にしても蒲生にしても。初めて現地に行く人をどれだけ増やしていけるか、というのが数字の上での目標です。今日もたくさんの方に来てもらっていますけども、それはオモイデツアーのスタッフが上手く“場”を作ってくれているということもあります。気負いなく荒浜や蒲生に行くためにはどうしたら良いかということ、私たちは一番考えていることです。その意味では、沿岸部に行っても良いのか何を話してくれば良いのかな、というのを感じさせないでスッと入っていけるようなことを、オモイデツアーのスタッフの皆さんも考えてくれていると思います。今年度は500人近くの人たちが荒浜と蒲生に足を運んでくださったというのも、そういうことが少しずつ実ってきていると思いますね。

北野：ありがとうございます。オモイデツアーさんが一緒に「行く」ということであるならば、HOPE FOR projectさんのプロジェクトは、3月11日に「来ても良いよ」という場を作られているのだと思うのですが、改めてHOPE FOR projectを始めるきっかけや、プロジェクトの概要などを教えていただいても良いですか。

高山：震災当時は、避難所となった荒浜小学校で安否確認を続けていました。その後、同級生と集まって荒浜に行くと、写真が道端に落ちていて、やはり誰も拾う人がいないんですよね。そのまま写真も風化していってしまう。それをまず、同級生たちと一緒に拾おうとなり、写真を拾って区役所の方に届け、区役所の方には返却会のようなことはできないかとずっ

と打診していました。

そのようなことも終わった後に、荒浜にある、遺族というかそのような同級生の会社で働くことになりました。その彼と一緒に過ごす中で3月11日も近いということで、同級生で集まり、「花の種でも入れた風船でもリリースしてみようか？」と軽い気持ちで、当日を迎えたんです。そうしたら、荒浜に1700人近い人が来ていて。風船も発注を間違えてたくさん頼んでしまったので、「みんなで飛ばしてみませんか？」ということになりました。

ただ風船を飛ばすだけならば、色んな所であると思うのですが、あの日に風船を飛ばした時にやはり涙を流す人がいたり、手を合わせる人がいたり、「誰々ちゃんにバイバイと言わないとね。」と言うような光景を目の当たりにした時、こうした思いが1年の間この場所になかったことなんだなと思いました。今後どうなるか分からないですけども、3月11日という時だけは、こういう言葉に出さなくとも、思いを馳せられたらと思って続けています。

北野：佐竹さんはこの日に参加されたことがあるんですね。その時の様子とか感想とかありますか。

佐竹：私はHOPE FOR projectさんの風船リリースに過去2回、こっそりとお邪魔させていただいたんですけども、その日はちょうど地震が起きた時間に観音さま前で慰霊式が行われていました。東京の国立劇場で行っている会のラジオをつけ、それに合わせて黙祷をするというのが、ここで言うと失礼かもしれないのですが、その人たちに本当に馴染む形で行われているものかなと少し疑問に思いました。その後、HOPE FOR projectさんのスタッフさんがカラフルな風船を抱えて街を歩いてきて、一つずつ渡してくださるんです。そして、津波が来た時間に一緒にリリースするというのが、黙祷の時に取り残された感情をそこで捉え直したような時間だったように感じました。その風景がいつまでも頭の中に残っていて、荒浜に行くとき折に触れて、青空に飛んでいる風船の撒かれた種みたいなものがなんだか残っていて思い出します。

北野：でも嬉しいですね。参加してもらって。

高山：そうですね。風船を飛ばす時に、皆さん何か言葉を発するというようなことはされないんです。震災から6年経つなかで、「本当はね……」と持っていることを口に出せなくなってきている気がして。それが本当は、大事なことだとは思うんですよ。でも一番大事なところこそ、なかなか言語化できなかったり。

今、荒浜で街づくりのようなことが始まろうとしてはいるのですが、どうしてもその土俵に立てない人がたくさんいるんですね。ただ、そういう状況でも、その思いだけは無くしてはいけないなと思っています。言葉に出さなくとも、思いを馳せられる時間だけは大事にしていきたいと思っています。だからこそ、地元の人たちだけではなくて、海水浴に思い入れ

のある人だったり、多くの人に参加してもらえれば良いなとは思っています。

北野：他の人と話していると、沿岸部は行ってはいけないと思われていたりするんですよね。特に3月11日は当日でもあるので。僕も部外者なので「どうかな？」と思ったりするんですけども、行って良いんですよね？

高山：良いと思います。吊い方は色々あると思いますし、その日の過ごし方も色々あると思うので。ぷらっと荒浜に足を運んでもらっても良いように、こちらも迎える場所を作りますし。来られた人が無理に何かをしなくても良いんです。ただ僕らも伝わるものをしっかりと作っているの、その日が穏やかになるように何かを持って帰っていただければというのがありますね。

北野：先程、手を合わせるとか、吊いの形が色々あって良いのではないかという話がありましたけど、風船を上げる行為でも、その手を離すタイミングで一人一人思いを馳せられたり、風船がカラフルに上がる風景によって想起できというのは、すごく大切なイベントだなと思ったのですが、これまでに（そうした「吊いの形」にも）変化はあったのでしょうか？特に食べ物が映っていたかと思うのですがあれは？

高山：最初は同級生だけで始めたのですが、手伝ってくれる地元の方が増えてきました。それも、もちろん僕らよりも上の世代の方々に。当日はとても寒いので、何か温かいものを出したいなと思いました。それで、荒浜の精進料理に、油揚げのお吸い物があつたんです。荒浜地区で食べられていたのかな？ちょっと詳しくは分からないんですけども。「に」という食べ物で、当日来られた方々にその「に」を無償で提供できたという話になりました。

北野：でも良いですね。食べ物があるのも大事ですね。

高山：寒いので。来てもらった人には、温まってほしいなと。

北野：佐藤さんもオモイデツアーでは、食べることはどのように考えられています？

佐藤：オモイデツアーに関して言うと、荒浜や蒲生の人たちと、地元のお父さんお母さんたちに作ってもらって、あるいは一緒に作る場合もありますけども、一緒に食べおしゃべりをして一日を過ごします。何か特別なことをするというのではなく、日常を取り戻すという意味で普通に一日を過ごすという。今日もお越しいただいておりますが、蒲生の笹谷さんや、荒浜の喜一さんの活動拠点があって、そこで1日を過ごさせていただいているということは、オモイデツアーにとって大変有り難いことだと思っています。

北野：それは本当に。荒浜もいくつもの場所が開いていたり、蒲生の方でも笹谷さんらがご自身で場所をつくられてきて。そういう基礎的な部分をつくってくれ、「来ても良いんだよ」と言ってくれる人がいることはすごく大きいですね。

HOPE FOR projectの方もそうですね。たとえば3月11日もそうですけども、もう一つお盆の日にもありますよね？そのプロジェクトを少し教えていただけますか？

高山：荒浜の西区に、自分たちの手で住宅基礎を改装して、大人子供が遊べるスケボーパークを運営している方が僕の先輩でいるのですが、その方の土地を借りて協働で夏祭りのようなことを一昨年からはじめました。映像にも映っていた荒浜小学校卒業生の佐藤那美さんに演奏してもらい、未だに明かりがないので明かりを灯して、音楽を聴きながら過ごしてもらおうという企画をしています。

北野：そちらもどなたでも参加できますか。

高山：もちろん大丈夫です。

北野：僕も仕事の関係で、3月11日は行ったことがないのですが、初めて昨年のお盆にオモイデツアーさんに参加させていただいて、その後にHOPE FOR projectさんのライブがあったので参加しました。3月だと少し緊張するかと思うのですが、お盆とともに過す夏の一日は個人的にすごく楽しかったです。すごく良いイベントだなと思いました。

高山：ありがとうございます。今年もやるつもりなので。

北野：では次に佐竹さんの映像と活動を、振り返っていきたいと思います。まず、一連のプロジェクトと言いますか、制作を始めたきっかけなどを教えていただいても良いでしょうか？

佐竹：荒浜のバス停はご覧になっている方が、いらっしゃるかもしれないのですが、他に何をしていたかをお見せするのは今回が初めてくらいになるかと思います。映像で私がお見せした一連の行動をしてきたきっかけは、震災後の荒浜に一人で訪れたことが大きくあります。荒浜に限らず、震災後の沿岸部では本当に様々な方が活動されていて、誰かが来られるような場所を作っておられます。そうした場所に行って、その人に出会い、その地域を知るといふ方がいるのと同時に、おそらくその場と出会わずに、一人で行ってその土地だけを見て、帰ってくるという方が必ずいるのではないかと考えています。という私も最初はそっちの方でした。

それで、その場所を何回も訪れる時には必ず通る道なのですが、「あ、この宅地跡はまだ残っている。残ってくれている。」と訪れる度に何度も目にするんです。その時に、色んな疑問や問いが出てきました。例えば、どうして終点までこんなに短い所にバスは来ないんだろうとか、どうして住めないのだろうか。草原になっていることに対して、ものすごく色んな感情があるけれども、それに対して、よそ者はそこに触れてはいけないのではないかと。ずっとそういう風にもやもや考えていたのがきっかけになっています。

北野：今は、荒浜や仙台でもあのような活動をされていますけども、東京の大学に行かれていた時も絵や色んな活動をされていたのですか？

佐竹：私は震災の前の年から東京の大学に通っていて、丸6年は東京で生活をしていました。3月11日も東京にいて、沿岸部で起きている出来事をテレビで見っていました。その後も自分の生活が東京であったので、なかなか沿岸部で何かができるとは思っていませんでした。「美術で何か力になれるのか？」という疑問も抱えたまま飛び込んで行くことはできなかったのですが、ただそのもやもやとした感情があったからこそ、作品に影響しない訳は絶対になかったんです。絵を描くにしても、そのモチーフがどこか沿岸部のことに似ていたり、ものをつくってその街のことにリアクションができるか試したり、というようなことを長年していました。

北野：最初のバス停が置かれた時は、やはりみんな驚きました。それから佐竹さんは、佐藤さんたちが一緒に活動をされている工藤さんの定点観測写真の、震災以前のバスの写真も少し見ていたと聞いたのですが。

佐竹：あれは、3.11 オモイデアーカイブの中の活動と言ってよろしいのでしょうか？正実さんたちが積極的に沿岸部の定点観測をされていて、その記録写真を私も拝見していました。特に荒浜の定点観測で、深沼海岸の終点の停留所があった写真を2枚縦並びで見せるというのを、バス停を置く前から知っていたんです。震災前は、松林が続いていた荒浜の街並みの次の写真が、がらんどうになっているのを見て、そこに直せるものや作れるものがあるって、直せてしまえば良いのと思いつつながら。そのような思い上がりを、と思いつつながら制作を続けていたのですが、そこに新しくバスを来させることならできないのではないかとずっと思っていました。それでその後、正実さんを始め現地のみなさんに協力してもらいながら、もう一度その風景を見てみたいと思いつつながら活動をしていました。

北野：佐藤さん、ちょっと嬉しくないですか？アーカイブの利活用がいたる所で言われているなかで究極の形だと思うのですが。

佐藤：本当にそうですよね。もともとスタートしたのは、記録された素材をどうやって使うかということでした。それで NPO 法人 20 世紀アーカイブ仙台を 2009 年に立ち上げ、そこで 2011 年の震災アーカイブとして取り掛かって以降、どうやってそうした素材を使っていくのが一番良いのか、どうしたら市民レベルで使えるのに理想的かと色々試行錯誤してきました。

例えば、仙台市の「伝える学校」の枠組みで行った「60 秒で伝える 3.11 ムービー」や、メディアテークさんと一緒にやらせてもらった「3 月 12 日はじまりのごはん」などがありますね。どうしたら記録を使ってもらえるのか、使い続けることができるのかという問いをずっと掲げてきたところに、佐竹さんのような表現をする人が現れ、バス停が置かれた訳です。それで今度は、そのバス停はやはり主であるバスを待っている訳で。写真の利活用から、今度は想いの実現と言いますか。そういった協働していける面白さみたいなものに発展していくというのが、この 5、6 年の中の変化ですかね。

北野：バス停がバス停でバスを待つとか、バス停がバスの中に入って移動してバス停に置かれるという発想が何というか。

佐藤：ちょっと聞きたかったのですが、あの映像は誰が撮っているのですか。

佐竹：実は一人ではなくて複数人で撮っています。例えば、私がバス停を持って歩いている時は、当然私は撮れないので、後ろから母がついてハンディカムのカメラを回しています。

北野：もはやホームムービーですね。他にもお父さんとか。

佐竹：そうですね。父が回している時もありますし、私が回している時もあるんですけども。私はあの行為を、こういうことをしたいから撮ってというのを人に言えなかったんです。

北野：どういう意味ですか？恥ずかしいという意味ですか？やって良いのかという？

佐竹：恥ずかしいというよりかは、やって良いのかという方です。倫理的な問題も私の中では絶対正しいとは今後とも言えないという部分があるので。協力してもらう時も、ただ私の背中を追っかける存在にカメラを回してもらうのが一番自然だったんですよ。それで母に回してもらいました。

北野：そうだったのですね。バス停が置かれた時に、僕も個人的に噂を聞いて、すごく驚きました。映像でのなかで、「ありがとう」と言っているのもありましたが、高山さんはバス

停を初めて見た際はどう思いました？「ありえないな」とか思いました？

高山：本物かなと思っていました。仙台交通局の方で、何かやるのかなくらいに思っていましたね。

北野：それもちょっと嬉しいですね。やってくれて。

高山：そうですね。ただ点在されてはじめて、ちょっとびっくりしましたね。荒浜地区になんかたくさん増えていったので。

北野：今は何台あるのですか？

佐竹：今、偽バス停は10台立っています（2017年2月現在）。ただ、最初から10台も建てていこうとは思っていませんでした。1台建てた後に、荒浜で場所をつくってその場にいらっしゃる方とお話ししていくなかで、その場所一つ一つが今の荒浜のスポットだということを知りました。ここでバス停という言葉が出たので「待っている」という言葉を使いたいのですが、誰かが待ってくれている場所というのが私の中ですごく大きくなっていきました。荒浜に行く時も、またそこに顔を出したいなとか。これから荒浜を知る人も、震災から6年が経つ中でずっとそこに残っていてくれた人の所に足を運ぶようになって欲しいな考えるようになり、その場所にバス停を作りたいと思うようになりました。震災前にあったバス停だけでなく、これからの現在であり未来でもある場所を同列にしていくことで、荒浜が過去と今と昔が層になって見えてくるのではないかと思い、どんどん建てていきました。

高山：そうでしたか。僕自身も、そういう想いが本当に大事だと思っています。一つのアクションを起こすことは、なかなか難しいじゃないですか。ましてや、先ほど佐竹さんが言われたように、「正しいかどうかということが分からない」ということが、本当は大事なんだと思っています。あのような場所で、「これは本当に正しい！」とやり始めてしまうのは、そんなことはもちろんないので、常にそういう感覚を持ってやられているというのは本当に素晴らしいなと思いました。あと、いつからでしたっけ？荒浜小学校前までバスが走りますよね？いつか本当に佐竹さんが建てた終点まで、バスが走れば良いなとは思っています。

北野：荒浜小学校のバスが通るということは、偽バス停は引退するんですか？

佐竹：今ちょっと考えているところなのですが。本物のバス停が立つこととバスが来てくれることは、私にとっても本当に嬉しいことです。それで人を騙しはしたくないので、その場所

に立つお仕事は一時お役御免ということで撤去しようかなと思っています。つくったものは、これからも色んな活用ができると思っているので何かしらの形では使いたいと思っています。例えば、私はバス停をプラカードのように持って歩いたりもするので、それで旅する停留所みたいなことができるんだなと思っています。なので、これからは場所にとどまらずに色んな所に散らばっている荒浜を探しに行くような形で使いたいなと思っています。

高山：新しいバス停にも「ようこそ おかえり」と記載してくれても良いのではないかなと思っています。

北野：市長の声とか、交通局とかに書いたりしたら良いのではないですか？そういえば、オモイデツアーの蒲生編の看板も良かったですね。建ててはダメというのも参考になりそうですね。松の前の。

佐竹：その土地のことを何も知らない方が見て「なんだこれ？」と思っても、それをきっかけに疑問に感じ、知りたいと思うことは増えると思いますし、そこでこういうものがあったんだよというのを建ててくれる行為が、私にはとても愛おしいと思いました。

これからの復興事業で風景が大きく変わっていくでしょうが、一人一人の手でつくったものがそこに残っていること——例えば、震災直後にコンクリートブロックを重ね、祭壇に見立てる方が色んな地域でみえたのですが——それがずっと残っていくことが良いか悪いかではなく、残せる状況であることがずっとそこにあって欲しいなと思っています。あの蒲生の看板は、建ててはダメと言われてはいますが、私も尊敬して参考にさせていただいています。

北野：そういった中で、バス停があって、12月11日にオモイデツアーさんと一緒に市営バスを走らせたと思うんですが、そのきっかけとあってありますか？

佐藤：もちろんその偽バス停というのが増えてきているなというのは気づいていたし。今日はお見えになっていませんが、海辺の図書館の庄子隆弘さんの成果発表の時に初めて佐竹さんに会って、「ああこの人が偽バス停を作っていた人だったんだ」と思ってですね、それからちょいちょい会うようになりまして。オモイデツアーをつくるスタッフの人たちが大体40人くらいいるんですね。その人たちはアイデアも豊富に出るし、オモイデツアーそのものはプラットフォームのようなもので、そこでやりたいという人が率先してやってくんです。そういった中で、バスを走らせるというアイデアが出てきたので、佐竹さんに話をしてみて。佐竹さんは佐竹さんで別の助成事業で企画書を作っていたんですね。その企画書を見せてもらって、面白そうなので一緒にやってみようということになって半年経たないうちに実現した。

しかもあの企画は、オモイデツアースタッフも盛り上がったけども、交通局の職員の人たちもすごく楽しんでくれたというのがあって。初めて打ち合わせに行った時、「あ！偽バスの人！」と佐竹さんが言ってもらえて。交通局の職員の人にも暖かく迎えていただいた感じでした。私も佐竹さんも交通局さんに行き先表示に深沼海岸というのに変えられませんか？と色々なリクエストはしていて、ツアー当日、深沼橋を越える時にバスの行き先が「深沼海岸」になっていて。そういう粋な計らいを交通局の職員の方々もやってくださったというくらい、みんなで作ったというか。佐竹さんの企画に皆が思いを乗せて、12月11日を迎えたというような感じでした。色んな人がオモイデツアーに関わって楽しんでくれたというのがすごく12月11日の一番の思い出で。それが今日の映像にも映っていたかなと思いますね。

北野：今だと、沿岸部のツアーだと、語り部さんがやられていることが一般的だと思いますし、観光ボランティアの方々が震災ボランティアになられてやられているという形などがあるかと思うんですけども、お三方のプロジェクトだと、文化だとか地域の歴史だとか写真という観点で、場所とかを作られていて、実際にオモイデアーカイズさんの場合、県内外の方が企画されていたり、その土地の方々も迎えたり、来る側というの関係性が行き来したりしていて本当に多様に作られているなと思うのですが。何か秘訣とかあるんですか？

佐藤：秘訣は分かりませんが、東日本大震災後、何か関わりたかったけど、できないでただとか、そういう方って結構たくさんいらっしゃるように見受けられていて。お亡くなりになった方達に手を合わせるという大前提の上で、そこに楽しさがあっても良いんだろうなと思っています。さっきの話の繰り返しになるんですけども、苦しいだけだと何度も人は集まらないと思っています。今日来てくださっている笹谷さんにしても、喜一さんにしても、多くの人にこの町に来てもらいたい、交流を深めたいというのを事あるごとにおっしゃっていて。そのためには、楽しむこともなければいけなくて。地域交流と世代交流というのは、震災前から20世紀アーカイブ仙台での大きなテーマで、それを実現するには写真や映像を使って何ができるのかというのがずっと課題でした。なので、今日も見ていただいた映像にあったように、思い出を語る会というのが私たちのメインコンテンツになっているんです。そして地域の方のイメージをあぶり出したものを共有できるようなことができないか、というようなことを考えていますね。

北野：中越の震災の施設の方にお話を伺うことがあって、その時に山古志に通い続けたりしている人はどういう人なんだろうとインタビュー調査をされていて、その結果を少し聞いたことがあるんですけども。そうすると、山古志にもいくつか集落があるので、その一つの集落は民宿にお金の関係で通う人、後は、他で結構長く来るというのは、星空の写真を撮りに来るとか、もしくは作っている彫刻をそこに置いたり売ったりする人とか、少し文化とか

趣味とか楽しみとかで来ている人が結構リピートされていると聞いたことがあるので、そういうところは大切なのかなと思います。

佐藤：私はオモイデツアーを主催する立場なのでその辺の答えが難しいのかもしれないです。参加してもらっている方に一度聞いてもらっても良いかなと思います。

北野：オモイデツアーさんに参加されている方でもし何か。もしくは HOPE FOR project さん、佐竹さんのプロジェクトを含めて一度お客さんの方から何か感想とか質問とかありましたら、手を上げていただけますか？・・・ないですか。ではどなたか指名していただいて。

佐藤：さっきのオモイデツアーの荒浜編で、バスの映像の中で感想を述べてくださっていた東海大学の水島先生、お願いできますでしょうか。

水島：東海大学の水島です。ご指名を受けましたので。3つの映像を見て、一番驚いたのは佐竹さんの映像で。佐竹さんってこういうの作られるんだと思いました。

北野：狂気じみているとか？

水島：え？

北野：一つ、狂気じみているものがあって。責任の取り方があるとか

水島：お盆の送り馬のきゅうりの曲がり方にですね、強烈に衝撃を受けまして。何か刺さって、今日の夢に出そうです。笑 HOPE FOR project さんが実はあそこでやられていたのは知っていて、なかなか時間が合わなくて拝見できなかったんですけども、荒浜小学校の中をあんな風に使倒していたんだということが。荒浜小学校はいつも外から見ていただけだったので。中から見てあんな風になっていたんだというのが、やっぱり刺さりましたね。やっぱりあぁいう建物が残っていくということは大きなことなんだなと思いました。それで、お三方のプロジェクトでどちらも共通しているのは、震災から6年経つことになるんですけども、お三方のコメントは全てその先を考えていらっしゃるということだと思うんですよ。震災が起きて、それまでの生活とか時間の流れ方とか、やっぱり転換点があったけれども、そこから6年の時間が経っているの、その先も多分時間があるので先にどういふことがあるのかという、とりあえずその6年間の答えなのかなと思って聞いていました。いつまでそのプロジェクトを続けられるかということが課題だとは思いますが。すごくその辺が分かって、また東京に帰ったりとか、別の地域で。実はバスの映像は今度、来週のやっぱり国際ファンタスティック映画祭で流すことにしちゃったんですよ。実は。ここでこ

んな話して良いのかな？実は北海道夕張市が財政破綻して10年が経って、石勝線は廃線になって交通機関がなくなるんですよ。その交通機関がなくなるというテーマで何か上映しようという話になって、それが返ってくるという話で。これは他の地域でも普遍できる話だとは思っているので。夕張の人の反応が返ってきたらまた紹介したいと思っています。

北野：ありがとうございます。それ気になりますね。夕張の人の反応とか。また高山さんの荒浜小学校を使わせてもらえるというのは良いですよ。自治体とかができるイベントの限界とかもあると思うので。それを使わせてもらえるというのは。

高山：そうですね。音楽に関しては、どこか街中の大きなホールを借りてやれば良いじゃんという声も多くあるんですけども、あそこの場所でやるから伝わる意味があると思っていて、それは音楽も見えないものだし、家々はもうないんですけども、その建物のもつ力というのがもしかしたらあるのであれば、それが音楽とともに伝わっているのなかとは毎年思いますね。

北野：改めて、ご指摘いただいた、これからというのをお三方に一人ずつ伺いたいんですけども。これから HOPE FOR project さんは。

高山：HOPE FOR project としては、来月の3月11日に地元の人々にとっては帰ってこれる場所として、仙台市や県外の人にとっては、3月11日の過ごし方に荒浜を選んでいただけるのであれば、それを迎え入れる場所として今後も出来る限り続けていきたいなと思っています。それ以外に、荒浜の場所、仙台市の沿岸部が、今利活用というところが問われていまして、これからどうなるかわからない中で、ただ僕よりも下の世代の子たちとか、当時高校生だった子たちに話を聞いてみるとやっぱり色々な思いを抱えていて、それがまだ声なき声になっていて今後の街のあり方としては、こういう若い世代の声とか、もちろん場所を思う人たちの声だったりとかが反映されたところで、成り立っていくべきだなと思うので、僕はそういう若い子たちや地域の人たちの声を聞いてそれをあそこの場所のあり方に反映させていけるような活動を変わず続けていければなと思っています。

北野：ありがとうございます。佐藤さんは？

佐藤：オモイデツアーに関しては、よく話をするんですけども、オモイデツアーはいわゆる被災地ツアーとは思ってなくて。よく言うダークツーリズムという言葉があるとすれば、オモイデツアーはウォームツーリズムと言って。現地の街の人たちの温かさに触れて、その人のファンになって帰ってもらう。町のファンになって帰っていただく。観光というのは見えるものを見に行くことだと思うのですが、オモイデツアーに関して言えば、見えないも

のを見に行くツアーという意味合いがあって、何によって想起させるのかと言えば、そこに住む人たちの思い出ですね。オモイデツアーに関しては、今年度で市との協働は終わってしまうのですが、ただ活動自体はここで止めるべきではなく、5年経ってむしろこれから重要なコンテンツになってくると思っています。ますますスタッフとも楽しみながらツアーを作っていけたらなと思っています。

北野：HOPE FOR project さんも寄付を募りながら進めていると思うんですけども。オモイデツアーさんは仙台市のというのがあるかもしれませんが、使う場所としては小学校でも、HOPE FOR project さんの小学校や、オモイデツアーさんの小学校とかもしくは募集だけ協力して入れるとか、また新しい協働の形がそれぞれ見つけられればなと思うんですけども。それで、佐竹さんは先ほど少しおっしゃられていましたけれども、今後って。

佐竹：今の状況は、3.11 オモイデアーカイブさんと荒浜のみなさんのお力を借りて一度バスを走らせたところなんですけども、今日一緒にお話しさせていただいたお二人がつけられている場も荒浜にあるし、ここに今日お見えにならなかった方々で、今まさにスケートパークの場所を開かれている方もいらっしゃるし。その荒浜にいくつもある場所に人を運んで行くことを少しやってみたいなと思っています。バスを接着剤のように使って、どんどんそこに人を落としていく。そこまでの使命を少しやってみたいなと思っています。

北野：またバスが走るのが楽しみです。他に、会場の方から何か質問とかご感想とかありませんか？

お客：佐藤さんに少しお聞きしたいのですけども。ウォームツーリズムですか、ダークツーリズムではなくてウォームツーリズムにしていきたいという所にすごく共感したんですけども、少し意地悪な質問かもしれないんですけども、もし思い出を語る人がいなくなったら、どうするのかなという。当事者がいなくなったら。今映像で語られていた方々はすごく高齢の方々に、その方々のお話を聞くのはすごく楽しいんですけども、いずれそういう人たちが語れなくなる時は来ると思うので、その後の展開などはどのようにお考えなのかなと少しお伺いしたいなと思いました。

佐藤：今の段階で、東日本大震災の発生から6年目を迎える段階ではなかなか答えは難しいかもしれませんが。ただ、先例があって、20年前の阪神淡路大震災ではどうなっているのかというのを見てみれば、14年後の東日本が見えてくると思うんです。落語で言えば師匠と一番弟子、二番弟子というのがいれば、師匠がいなくなったら、一番弟子というのが師匠の芸を盗んでちゃんと伝えられる。その兄弟子の下にいる弟弟子が、その芸をまた盗んでいくという。そういうような弟子作りが必要かなとは思っています。ただ、写真を元にした弟

子作りは、どこも取り組んでいないので、おそらく東日本大震災モデル、仙台モデルと呼ばれるのかもしれませんが、そろそろ弟子作りというのにも取り組んでいかないといけないなとも思います。ただ、荒浜にも、蒲生にも、若い人が関わっていないわけではないので、直接は体験してはなくても、彼らがその関係性になりうる可能性はあると思っています。

北野：僕は以前、語り部さんたちのところに、東日本大震災のことで聞きに行った時に、「私は語り部ではないんですけども」と前置きをされて説明して下さったんですけども。語り部ではないというのは、多分直接津波から逃げられて生き残った方々、もしくは家族を亡くされた方々をその方が語り部と言っていて。その方自身は、当日内陸部にいたので、津波も見えてなくて、ご自宅を流されたということだったらしいんですけども。そうした時に、被災度合いを比べ合うというのが、語り部さんの中でも起きてしまうと、段々被害が大きかった人のみしか深層心理として働けなくなると思うんですよね。それで戦争とか、原爆とかというのも、第二世代が担っているということもあると思うんですけども。語り手も比べあってしまったたり、もしくは体験だけを言うということだけではなくて、ウォームアップとかもしくは音楽と風船を上げることとか、バス停など、震災のことだけではなくて、その土地の歴史とか、その土地を楽しむという行為とかイベントを企画されている方々が、高山さんも佐竹さんもその土地について語れたりするわけなので、何かは震災だけではなくて、文化や趣味とかイベントを通してその土地で伝わっていくことがあるのではないかなと思うんですけどもね。では最後に、一言ずつありましたら？

高山：今の話の流れで、本当に大事なものは正しいとか間違っているということは僕は言えないんですけども、なんでその場所でなきゃいけないのか、なぜその場所でやる意味があるのか、ということは沿岸部すべてがやはりただの空き地ではないんですよね。目に見えなくても、やはりそこに暮らしがあって。じゃあそこがなくなったから、土地を利用して何かやりましようと言った時に、なんでそこじゃなきゃダメなのかということが大事な気がしています。そうでなければ、あの日誰かを守ろうとして亡くなった人たちがやはりいるので、そこだけはこれから入ってこれる事業者の方々にも大事にしてもらいたいなとは思っていますね。

北野：もう一個、大川小学校の方々のお話を聞いた時に、僕らは震災以降、被害の大きかった地域と認識していたんですけども、卒業生の方があそこで相撲を取っていたんだとか、そういう話をなされていたんですよ。震災だけではなくて、その前にそういう楽しい生活もあった場所だということが、荒浜小学校でも同じことで。そういう楽しい部分が見えてもいいのではないかと思います。

佐藤：私たちは、一番テーマであるのは、関わりしろをいかに作っていくかということです。震災から3年くらいの時にも思ったことでもあるのですが、「今さら」ではなくて「今だけ

ら」できることがあると思うんです。津波被害地の方々には、語る苦しみのない震災前のふるさとのことをたくさん語っていただきたいし、街中の方にはもっと震災体験を語って欲しい。そんな市民の関わりしるをどう作っていくのかが、これからの肝になっていくのでしょう。とにかく市民の関わり方を広くしていきたいと思っています。以上です。

佐竹：最後に回ってきてしまったのが、なんだか大変重いのですが。色んな関わり方ののり代を残してくださっていて、全く他所から来た、何もその場所を知らない人でもそこにいて良いような場所を作ってくれている今の荒浜があって、私も何かをやらさせていただいているんですけども、もう少し日常的なものにしていけたらなという風に思っています。

北野：ありがとうございます。3月前の忙しい時期にありがとうございます。みなさんご来場いただきありがとうございます。これでアフタートークは終わります。